

河北潟 かほくがた



N P O 法人河北潟湖沼研究所通信

Vol.15 No.4

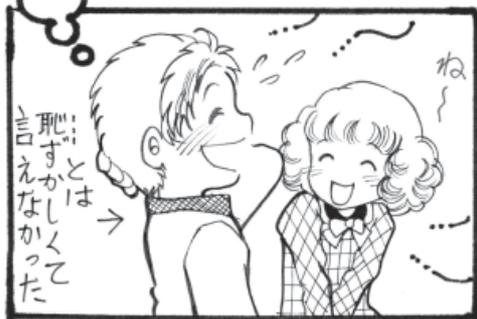


琵琶湖外来植物視察ツアー

2009年12月11日に、河北潟湖沼研究所としては初めてバスでの県外視察を行いました。目的は、琵琶湖で問題となっている外来植物の現状をみること、また現地の駆除活動を見学することです。琵琶湖では、チクゴスズメノヒエよりも繁殖力の強いナガエツルノゲイトウが最近の3年間で急速に拡大して、大きな問題となっています。今回の視察では、広域に繁茂する現状をみることができました。現地では近江ウェットランド研究会代表の野間直彦氏(滋賀県立大学講師)と現地でミズヒマワリ

等の駆除活動の指揮をとっておられる栗林実氏にご案内いただき、外来植物対策についてもいろいろと意見交換することができました。往路の移動時間には、金沢星稜大学永坂正夫氏と石川県地域植物研究会の白井伸和氏による、河北潟の水生植物と陸生植物のレクチャーもありました。今回のバスツアーには、河北潟土地改良区の関係者や行政の方にも参加いただきましたが、除去活動と日常の監視、及び早期対応が大切であることをお互いに理解でき、大変意義のあるツアーとなりました。

第16回 ゴリ



石川県とくに金沢では、なじみの深い魚ゴリ(鮎)、淡水産のハゼ類とカジカ類の総称です。鮎汁、鮎の刺身、鮎の唐揚げ、そして鮎の骨酒、さまざまな加賀料理に使われています。こうした料亭でいただくことのできる高級なゴリはカジカです。浅野川や犀川の上流に生息しています。一方、佃煮にする庶民的なゴリは、河北潟などにいるヨシノボリ類やウキゴリ類などの小魚です。対照的な二つのゴリですが、いずれも扁平なごつい顔。どことなく愛嬌があります。川底にへばりついて生きている魚です。普段はあまり動き回らずに、目の前に現れた川虫などを大きな口でひと飲みします。

このうち河北潟に多く生息するヨシノボリには吸盤があって、垂直な石の面にも身体を固定することができます。矢板護岸のところで頭を上に向けて多数がへばりついているのを見ることがあります。また、ある程度は壁をはい上がることもできるため、水路の仕切り板を乗り越えることができます。ヨシノボリはかつては1種類だけといわれていましたが、分類学的検討が進むにつれ、数種に分かれました。このうち河北潟にいるのはトウヨシノボリです。本種は、河北潟のような河口域から、上流の細流の奥にあるため池にも見かけることがあり、生息域の広い魚です。

ウキゴリ類は、ゴリの中では川底だけでなく少し上の方へ上がってくるのでこの名があり、河北潟では、ウキゴリとシマウキゴリという2つの種がいます。漁では、ヨシノボリと合わせて網で捕獲します。河北潟ではゴリ曳網というものもあったようです。

一方、川の上流にいるカジカは、大きな石の間に隠れています。このカジカの漁には2種類あって、ひとつは箱眼鏡で水底を覗きながら移動して、見つけたカジカを引っかけてとる漁で、もうひとつは二人一組で三角の網に追い込む漁法です。石の間に隠れたカジカ

を網に追い込む時に、石をごろごろと押す板をゴリ押し板というらしく、無理矢理に自分の意見を通す意の「ごりおし」の語源となっているという説もあるようです。

昔、犀川上流の支流で川虫の調査をしていたときに、川漁師さんがやってきて、箱眼鏡で覗きながらカジカを次々と掬い上げていきました。見とれていたら、あっという間に上流の方に消えてしまいました。私もその時箱眼鏡を持っていましたが、覗いても何もみえませんでした。印象深い思い出です。(文：高橋 久)

NPO 法人河北潟湖沼研究所 15 周年記念イベント
車座ディスカッション「NPO 河北潟湖沼研究所は必要か？」
報告（中編）

前号に引き続き、11月29日に開催された車座ディスカッション「NPO 河北潟湖沼研究所は必要か？」の報告です。中編は第2部、パネルディスカッション「河北潟湖沼研究所への注文」での各パネリストの発言の前半部を掲載します。誌面の関係からかなり端折っており、発言の一部のみの掲載となっていることをご了承願います。

第2部 パネルディスカッション
「河北潟湖沼研究所への注文」

今井敏彦氏（河北潟自然再生協議会）

河北潟湖沼研究所のことは、河北潟自然再生協議会をつくろうとおこなわれた発起人会のときに知りました。何回か湖沼研究所のフォーラムとか内灘の会合でも、出させていただいたのですが、わたしたちとのズレといたしますか、感覚の違いを感じました。やはり専門集団、知識集団だなと関心しましたが、はたして河北潟のいろんな構想とか色々なことが、河北潟の周辺住民の皆さんが関心を持って前向きに協力しようとしているのかと疑問に思っていました。

しかし最近、高橋さんにうちの会の事務局をしていただいて、毎月例会をしています。最近はものすごく地域の皆さんとともに歩もうとか、いろんなことを心に秘めながら接してやっていこうというところを感じるようになりました。それから、2年前になりますか、うちの町のほうへチクゴスズメノヒエを全部取るという話で、大きな川のチクゴスズメノヒエを取り終えてやれやれと思っていたら、高橋さんたちは小さい水路までみな観察しておって、「あそこにもあります、あそこにもありますよ。」ということで、地域の細かいところまで観察されていることがわかりました。従来の専門家集団から、地域の住民のレベルまで下がってこられたように感じ、地域の自然を守るとともに、地域の住民があまり振り向かないところに、きめ細かく注意もしていただくということで、大

変最近是我ららのレベルまでともに歩いてくれる姿勢になったなあ、というようなことを実感しています。

新村光秀氏（河北潟環境ボランティアスタッフ）

湖沼研究所が発足する時からよく存じています。わたしは金沢市の職員で、平成6年に当時の環境保全課の水質係長に異動しました。河北潟について取り組んでみたいという思いがありました。その6月か7月に1市5町の課長会議というのをやってもらいました。ちょうど河北潟湖沼研究所もメンバーの人たちがいろいろ話し合いをされながら、気運が盛り上がっている時期に、行政の方でもちょうど河北潟に取り組む時期だった。ちょうど良いタイミングだったなという思いをしています。平成6年に計画を作るという段取りをして、平成7年に計画を作り、平成8年に実際に活動をはじめるという形になっていきます。平成9年に、河北潟水質浄化ボランティアスタッフという組織を立ち上げました。河北潟の水質浄化をするボランティアに情報などを提供して、ボランティア活動が円滑にすすむよう協力するという組織です。

河北潟湖沼研究所も、さきほど高橋さんから色々な活動の報告がありましたけど、15年間取り組んできた成果というのは重みがあると思います。これから今まで取り組んできたことを、いかに行政とか、地域住民の皆さんに発進していくか。行政で河北潟について、自然、あるいは地域資源として、専門的に研究されている部署はわたしはないと思います。農業政策、環境政策、土木とか個々の政策的なことを考えている部署はありますけど、それらをトータルして、且つ地域資源は何かということで、農業との共存ということをふまえて取り組んでいるのは河北潟湖沼研究所じゃないだろうかと思えますし、これからはもっと役割というのは重要になっていくのではないかなと思います。多いに期待をしています。

（7ページへつづく）

第12回 自然を読む力

河北潟の東側に位置する集落、「潟端^{かたばた}」で暮らしてきた昭和4年生まれの坂野 巖さんに、水郷の景観がひろがっていた1950年代頃（昭和34年頃）までの潟端の自然と暮らしについて聞き書きしています。

河北潟を巡った物々交換

潟端は藩政時代に開村した部落で、河北潟の東縁を開墾してできた水田地帯にあります。潟端の暮らしは稲作が基本でした。逆に河北潟の西側、日本海に面した砂丘地では稲作は難しく、漁業が盛んでした。そのため、潟端など河北潟の東寄りにある部落と、旧内灘村の大根布、宮坂、西荒屋、室、内日角とは昔から物流・交流があったようです。

潟端から内灘へは、米、屑米、藁、薪、灰などを、反対に内灘からは、魚貝類、昆布、スルメイカ、当時は作れなかったスイカやサツマイモなどをいただきました。地元では手に入らない物を交換、売買して、お互いに生活の足しにできました。

4月下旬頃になると、日本海では鰯がたくさん獲れ、内灘の人たちが舟で運んできました。内灘から河北潟を渡って来た舟は、川を遡って取引する家の前まで来ることもあれば、部落西側にある「どんど」（部落から流れてくる水をせき止めていた場所）に舟を着けて商いをする人や、潟から川に入って間もないところで上陸して売り歩く人もいました。天秤を担いだ内灘の人が、「鰯いらんかいね。」と大声をあげて売りに来たものです。

内灘から運ばれてきた鰯には砂が一面につけてありました。鮮度を保つために塗された砂で、鰯は新鮮な状態で届きました。そうした鰯しか見たことがありませんでしたので、潟端では誰もが「鰯には砂がついているもの」と思っていました。

内灘の人たちは、冬になると北海道へ出稼ぎの漁に出ましたので、北海道の昆布やスルメイカなども持ってきてくれました。とくに珍しいのがホタテの干し貝柱で、高級品でなかなか口

に出来ませんでした。家の向かいに内灘の舟が繋がれていると、内灘から人が来ていることがわかり、その家の知人や親しくしている人たちが集まりました。囲炉裏端へ上がり込んで、北海道の話を書いたり色々な話をしたりと交流が賑やかにありました。話が弾んでくると、北海道民謡の江差追分やタント節を習って謡うこともありました。

潟端では、米一升でよく取引がおこなわれました。当時は地主に年貢を納めていたので、目立たないように小売りしていました。米は収穫後に米選機に流して、屑米と選別します。金網の幅を調整して、小さいサイズの米(屑米)を下に落としました。一等米を用意するときには金網の幅を広くして、大きいサイズの米だけが残るようにします。そのような選別方法なので屑米の質は様々でした。方言で「ダゴノモン」というと屑米のことで、誰にでも通用する言葉でした。屑という言葉からは不要な物というイメージを受けますが、屑米は貴重がられたものです。屑米を石臼で挽いた米粉を、小さい団子にして押しつぶしたものを小豆で煮込んだお汁粉は、非常に美味しくてお腹もふくれました。手間の掛かる汁粉はお婆ちゃんがつくってくれる有り難いものでした。

潟端は稲作のおかげで、日常煮炊きするときの燃料にする藁や籾殻がたくさんありました。また、囲炉裏端で藁や薪を燃やしたり、竈でご飯を炊くときに籾殻を燃やすので、非常にたくさんの灰がたまりました。一方、砂丘地側は水田が少ないので、潟端の藁や籾殻、灰が必要とされました。藁や灰は、畑の肥料にもなりますが、サツマイモなどの苗にかぶして砂で焼けるのを防いだり、湿度を保つのに使われたようです。砂丘地の松の葉は燃料にされましたが、松葉を燃やしてとれる灰は少量でした。

大事にした言い伝え

当時は現在のような交通網が発達しておらず、一般には舟以外は人力の荷車しかありませんでした。潟端から内灘まで行くには、陸からは遠回りになるので、舟のほうが楽でした。ただ潟端の舟は、稲を運搬するために作られた舟でしたので波が入りやすく、潟端の舟で内灘へ行くことは稀でした。潟端でも浜通いする人(内灘へ行商に行く人)が数名いましたが、そうした人たちは内灘の中古品の舟を買って使っていました。内灘の舟は舳先が上がっているので、多少波があっても大丈夫でした。

西荒屋の二ツ屋彦次郎さんとは、むかしから坂野家と交流がありました。西荒屋から舟で河北潟を渡ってきたときに、坂野家でよく一服しましたが、「河北潟に吹く風は時計の針周りで、北風が吹いたら、山瀬風になり、そして下りの風にまわる。漁をするときや潟を横切るときの知恵だ。」と、よく語っていました。潟端では、北風のことを“北風(あいかぜ)”、東風を“山瀬風(やませ)”、西風を“西風(まにしにのかぜ)”、金沢の方から潟端へ吹く南西の風を“下りの風(くだりのかぜ)”と言っていました。内灘の人は風向きが悪くても、帆を操る技術を持っていましたので、斜め向かい風が吹いている中でも上手に帰って行きましたが、追い風を利用すると楽に帰れるようでした。「北風が吹いて、山瀬風になったら、帆を上げて帰らなダッチャカンワ(方言：帰らなければいけないわ)」と言って潟端を出発するのでした。

八十八夜を過ぎると(立春から数えて88日目)潟端では霜が降りないといわれました。水苗代の時は、霜が降りたら水をかけないと苗の先が白く枯れるので注意が必要でした。また、「霜は3日は続かない、3日目の夕方から雨となる、ただし3日で雨が降らない場合は4日目も晴れるが、夕方から下りとなる。」という言い伝えがありました。そのほかにも天気を予測する謂われが色々あります。「朝虹を見て川を渡るな、雨になる。」、「雨壺が(西南の空)が暗かったら雨となる。」、「うろこ雲が現れたら明日は雨」、「鳥の水浴びを見たら、明日は雨」、「太陽が日笠をかぶったら、明日は天気が悪い」、「月

が笠を被っていたら、天気が悪くなる」、「山が綺麗に近く見えたら、風が強く吹く。」など、小さい頃から親に聞かされました。情報の少ない時代でしたので、このような知恵を大切にしました。

自然現象

「波静かなる 河北潟 岸の田の面を 眺むれば 加賀の社の大神の 深き恩恵を 思うかな。」通学していたときの中條小学校の校歌2番です。校歌にもあるように河北潟は穏やかな湖でした。潟端は低地にありますが、家々が水に浸かる危険はありませんでした。大雨が降って津幡川が氾濫したときは、潟端でもとくに低いフゴ地帯の水田(もともとフゴのあった場所の水田のこと。フゴ：潟から切り離されてできた沼地・小さな湖)は水浸しになりました。粘土質で水はけが悪く、1週間も水につかったこともあります。稲が水につかると萎縮病にかかり、不作となりました。

天候の悪い時は、荒波と風の唸る音が日本海の方から聞こえました。日本海の家鳴りといわれるものです。家鳴りはいつも、潟端から見て金石のほうから聞こえ出し、それが次第に能登半島の方へ北上していきました。30分も同じところで家鳴りがすることもあれば、2~3時間で行ってしまうこともあり、半日の間、ゴォー、ゴォー唸っていることもありました。最近は騒がしいせいか、家鳴りが聞こえなくなりました。

また、河北潟の背後に見える内灘砂丘の上では竜巻がよく起きていました。潟端から見ると、金石から宇ノ気のほうまで日本海側が広く見え、端から端までの間に、5本も6本も竜巻が同時に数えられることもありました。金石港ができた頃からは、竜巻がまったく見られなくなりました。(聞き取り・文 高橋奈苗)



潟端に唯一残っている灰小屋。当時は部落内にたくさんあった。写真は瓦屋根だが、トタン屋根の灰小屋が多かった。

8月31日(木)

7時起床 8時の外気温は22度。

今日はドルジさんご一家の案内でテレルジ行き。テレルジはウランバートル東北東にある恐竜の骨の発掘地などとして有名な観光地である。ドルジさん運転の大きなランドクルーザーで出かける。

ウランバートル郊外へ出ると、見渡す限りの草原でゆるやかに起伏する丘陵の間を道は南下してゆく。中国の援助によって出来たというかなり立派な4車線くらいの舗装道路。ロシアから中国に向かう鉄道と平行している。丘陵の起伏する中に炭鉱の町ナライハがある。草原の中に建物が集まっている。露天掘りではなく町の中に坑道の入り口があるらしい。町から石炭を運ぶ鉄道が草原の中に走っている。

ナライハの近くからテレルジ行きの道路は本道を離れて東北に向かう。進むにつれて道は平原から次第に丘陵地帯に入ってゆく。小高い丘のところまで2人の男に会う。それぞれに頭から尾羽の先まで50センチ位の黒褐色のタカを腕に止まらせている。タカ狩りの猟師らしい。

岡の下をトール川が流れている。

進むにつれて丘陵は次第に起伏が高くなり、岡よりも山らしくなってくる。丘陵の下の部分は草原だが、上部はモミのような針葉樹の林になり、頂上の部分に岩山が出てくる。山地帯に入ったようである。



炭鉱の町 ナライハ

トール川にかかった橋をわたる。流れの幅は20メートル以上あり、水量は多くて軽く蛇行して流れる。流れの一方には疎らに草の生えた広い河原があり、もう一方の河辺には河辺林がよく発達している。

トール川を渡ると間もなくテレルジの「恐竜の村」に入る。観光客のための駐車場とグル・キャンプがある。大きな観光客用のグルやコテージが10あまり、集中して建てられている。高さが100メートル以上ある荒々しい岩山の下の草地には大きなコンクリート造りのいろいろな恐竜の像などがある。

キャンプを囲む山々は、ゴツゴツした巨大な岩塊が積み重なった岩山と、やや傾斜が緩やかで草地や森に覆われた丘陵とがある。私は周りの山の斜面を覆うモミの林に、縞枯れ状になっている部分があることが気になった。斜面に沿って縦に幅数メートルに樹が枯れた部分が稜線の近くから麓まで続いている。これが普通の自然現象なのか、災害なのか気にかかるが、周りにこのことを聞く人もないのでそのままとなった。

高い岩山と草山が起伏している谷間の道をたどる。草原に疎らな針葉樹林が混じり、シラカバの木立がある。500メートルほど先のひときわ高い岩山の麓に、岩壁に張り付くような形で、白壁に橙色の屋根の小さなラマ教寺院がある。山腹の大きな岩に仏像が彫り込まれている。観光用のグル・キャンプの他は地元の村らしいものが見られない山中にあるこのお寺を見ていると、古い日本の田舎で、村やその周りの里山から少し離れた、山中にポツンと建っていた「山寺」の風景を思いだした。

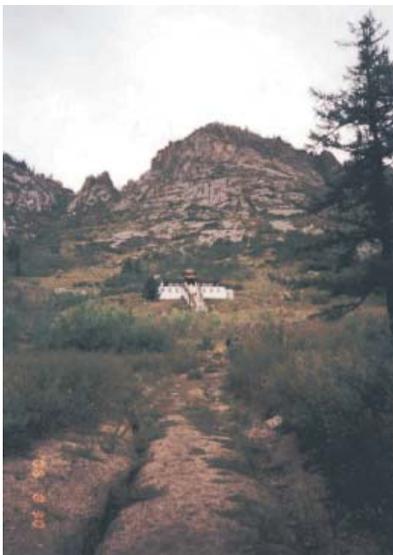
林を抜けて有名な「亀石」を見物してから、駐車場の傍のキャンプ地に帰り、特に大きなグルにあるきれいに整備されたレストランで昼食をする。ちょうど12時半で、扉を開けたままのグル内の気温は20度。周りの壁にはこのあたり

で獲れたというクマやオオカミの毛皮が掛けてある。クマは日本のツキノワグマよりやや大きな黒熊である。オオカミも毛皮になっているので実際の体長は判らないが、1メートル以上あると思われる黄白色あるいは灰白色の大きなものだった。クマもオオカミも毛が長いのが目立った。

このあとウランバートルへ帰る途中から横にそれて、ソーモツウの広大な草原の中で行われている観光用のジンギスカン時代のモンゴル軍の騎馬戦のショーを見た。これはたびたび日本

でも紹介されており、テレビで上映されたこともある。私は歴史書などで読んで興味を持っていた当時のモンゴル軍の攻城用の投石機をはじめて見る事が出来た。

その夜、ウブス県のサジ産業に関わっている会社の方から話を聞いた。この会社は日本に留学したことがある若い技術者がいる熱心な会社だが、サジの栽培は現地農家にまかせて果実の製品化を行っている。サジという果樹をめぐるいろいろな問題については、後でまとめて書きたいと思う。



テルレジ ラマ教の山寺



グル・キャンプのレストランの壁にかけられたクマとオオカミの毛皮
(この付近で獲れたものという)

長原克信氏（河北潟沿岸土地改良区）

干拓事業が終わったのは最終的に昭和60年ということです。その周辺に排水場9箇所ができましたけど、それら排水機場を河北潟沿岸土地改良区が管理するという事でいまままで管理をさせてもらっています。先ほど高橋先生の話の中で、河北潟の周辺地域は排水がポンプに頼っているということで、「将来的にはポンプに頼らない、災害に強い地域作りを。」と言っておられましたけど、なかなか管理している関係上、非常に厳しいのかなと。とくに河北潟は日本海の潮位によって上がり下がりするので、その辺の対策が必要ではないかなと思っています

ころです。

河北潟湖沼研究所は15年経ったということですが、最初に湖沼研究所のことを知ったのは新聞か何かで、河北潟の環境を考えるということで湖沼研究所が載っていました。当時わたしも一回か二回くらい、内灘のほうで当時は夜にみなさんで集まっているということで、ちょっと話を聞かせてもらいました。なかなか専門的なことを言っているし、話を聞いていると、「河北潟はやっぱりいまの状態ではいけない、むかしの状態に戻そう。」ということで、河北潟を海

(8ページへつづく)

河北潟総合研究第13巻が発行されました

2009年度の河北潟湖沼研究所の研究成果などを掲載した河北潟湖沼研究所機関誌「河北潟総合研究」第13巻が発行されました。今回は、5編の論文が掲載されています。1冊1000円で一般の方にも販売しています(送料120円)。購入ご希望の方は、河北潟湖沼研究所事務局まで。

タイトルと著者は以下の通りです。

〔タイトル 著者〕

河北潟国営干拓地の半世紀 桂木健次

津幡町の神社と祭神の分析 井上地区の神社

宮本眞晴

河北潟干拓地において群生する外来植物の分

布 高橋 久・川原奈苗

河北潟の沿岸帯の植生 - 旧浅野川河口部から

大根布防潮水門南東側の湖岸について

- 川原奈苗・高橋 久

環境アセスメントの『あるべき姿』について

(その2) 尾上健治

(7ページのつづき)

水を入れて浄化すれば綺麗になるんじゃないかと。私は農業者の立場から言いますと、非常に厳しいことをいっておられるなと思って、それ以来ちょっと顔を出していませんでした。

いまは高橋先生たちも湖沼研究所のみなさんも、農業の立場もいろいろ理解いただきながら、いまの状態をいかにどういうふう自然を戻していこうかと、一生懸命に取り組んでいますし、湖沼研究所はさきほどからみなさん言っているとおり、専門的なところもあります。そういった専門的なお知恵をいただきながら、農業者といいますが、そういったほうのパイプ役として、外来植物の駆除とか自然を守っていくと、今後もしていきたいと思っています。もうすこし農業者の方もわかりやすいような、そういったイベントとかを少ししていただければ、非常に有り難いかなと思っています。

野村政夫氏(河北潟干拓土地改良区)

河北潟干拓土地改良区の事務局と湖沼研究所さんとのつきあいというのは、土地改良区の組合に、前理事長の大館さんが入っておられたということと、隣の沿岸土地改良区さんの施設見学会で、高橋さんが講師として、子供達に生態系とか水質のことを色々教えておられたということです。それ以前に河北潟の将来構想を最初見た時は、河北潟を元に戻すということは、非常にわれわれ農業者団体としても、相反する考え方だなということで、できるだけ意見交換というか近づくことはないであろうなとは最初思っていました。

いま農林所のほうの事業では、環境配慮ということが求められていまして、農業も食糧増産だけでなく、環境に配慮した農業をやっているということに進んでいます。湖沼研究所さんと今井さんの河北潟自然再生協議会さんに声をかけて、環境活動を中心に、計画から実践までいろいろご指導していただいております。

それで先ほどから湖沼研究所さんへの注文はということですけど、これから環境ということが重視されてくるということになりますと、河北潟の水質が非常に悪いということがありますので、これが将来的に河北潟の水が綺麗になるような環境づくりをめざしていくことを考えて、ということが我々としては理想ではないかなと思います。生態系もそれに付随して、元に戻るといえることはないと思うのですが、良い環境が戻ってくるのではないかと思います。おたがいに農業と環境は相反するところはあると思いますが、河北潟の水辺環境を良くしていくことを目指して、一緒に議論を戦わせていければなど、いまは思っています。(次号へつづく)

編集後記

今年は3月23日に河北潟干拓地でツバメが飛んでいるのを初めて見ました。まだ寒い日が多いですが、少し早い春を感じました。(N)

